

安全データシート

1. 化学品及び会社情報

化学品の名称 : ジエチレングリコールモノエチルエーテル

SDS コード : A8-19

供給者の会社名称 :

林純薬工業株式会社

住所 : 大阪府大阪市中央区内平野町 3 丁目 2 番 12 号

担当部門 : 試薬化成品部 企画グループ

電話番号 : 06-6910-7305

E-mail : shiyaku_kikaku@hpc-j.co.jp

URL : <https://www.hpc-j.co.jp/>

緊急連絡電話番号 : 06-6910-7305

2. 危険有害性の要約

GHS 分類

物理的危険性	鈍性化爆発物	分類できない
	爆発物	区分に該当しない
	可燃性ガス	区分に該当しない
	エアゾール	区分に該当しない
	酸化性ガス	区分に該当しない
	高圧ガス	区分に該当しない
	引火性液体	区分 4
	可燃性固体	区分に該当しない
	自己反応性化学品	区分に該当しない
	自然発火性液体	区分に該当しない
	自然発火性固体	区分に該当しない
	自己発熱性化学品	分類できない
	水反応可燃性化学品	区分に該当しない
	酸化性液体	区分に該当しない
	酸化性固体	区分に該当しない
	有機過酸化物	区分に該当しない
	金属腐食性化学品	分類できない
健康有害性	急性毒性 (経口)	区分に該当しない
	急性毒性 (経皮)	区分に該当しない
	急性毒性 (吸入: 気体)	区分に該当しない
	急性毒性 (吸入: 蒸気)	分類できない
	急性毒性 (吸入: 粉じん、ミスト)	区分に該当しない
	皮膚腐食性/刺激性	区分に該当しない
	眼に対する重篤な損傷性/眼刺激性	区分 2B
	呼吸器感作性	分類できない
	皮膚感作性	分類できない
	生殖細胞変異原性	分類できない
	発がん性	分類できない
	生殖毒性	分類できない
	特定標的臓器毒性 (単回ばく露)	分類できない

環境有害性	特定標的臓器毒性 (反復ばく露)	区分 1 (呼吸器系)
	誤えん有害性	分類できない
	水生環境有害性 短期 (急性)	区分に該当しない
	水生環境有害性 長期 (慢性)	区分に該当しない
	オゾン層への有害性	分類できない

絵表示
(GHS JP)



GHS08

注意喚起語 (GHS JP) : 危険
危険有害性 (GHS JP) : 可燃性液体 (H227)
眼刺激 (H320)
長期にわたる、又は反復ばく露による臓器の障害 (呼吸器系) (H372)

注意書き (GHS JP)

安全対策 : 熱、高温のもの、火花、裸火及び他の着火源から遠ざけること。禁煙。(P210)
粉じん／煙／ガス／ミスト／蒸気／スプレーを吸入しないこと。(P260)
取扱い後は手、前腕および顔をよく洗うこと。(P264)
この製品を使用するときに、飲食又は喫煙をしないこと。(P270)
保護手袋／保護衣／保護眼鏡／保護面を着用すること。(P280)

応急措置 : 眼に入った場合: 水で数分間注意深く洗うこと。次にコンタクトレンズを着用してい
て容易に外せる場合は外すこと。その後も洗浄を続けること。(P305+P351+P338)
気分が悪いときは、医師の診察／手当てを受けること。(P314)
眼の刺激が続く場合: 医師の診察／手当てを受けること。(P337+P313)
火災の場合: 消火するために適切な消火剤を使用すること。(P370+P378)

保管 : 換気の良い場所で保管すること。(P403)

廃棄 : 内容物／容器を国際、国、都道府県又は市町村の規則に従って廃棄すること。
(P501)

3. 組成及び成分情報

化学物質・混合物の区別 : 化学物質
別名 : エチルジグリコール、2-(2-エトキシエトキシ)エタノール

化学名又は一般名	濃度又は濃度範囲	化学式	官報公示整理番号		CAS RN
			化審法番号	安衛法番号	
ジエチレングリコールモノエチルエーテル	≥99.0%	C6H14O3	(2)-422	既存化学物質	111-90-0

上記濃度又は濃度範囲は、規格値ではありません。

上記濃度又は濃度範囲に記載の％は、個別表記があるものを除き、全て質量％となります。

4. 応急措置

応急措置

吸入した場合 : 空気の新鮮な場所に移し、呼吸しやすい姿勢で休息させること。
直ちに医師に診断／手当てを受けること。

皮膚に付着した場合 : 汚染された衣類を直ちに全て脱ぐこと。
多量の水と石鹸で優しく洗うこと。
直ちに医師に診断／手当てを受けること。

眼に入った場合 : 眼に入った場合: 水で数分間注意深く洗うこと。次にコンタクトレンズを着用してい
て容易に外せる場合は外すこと。その後も洗浄を続けること。
直ちに医師に診断／手当てを受けること。

- 飲み込んだ場合 : 無理に吐かせないこと。
口をすすぐこと。
直ちに医師に診断／手当てを受けること。

5. 火災時の措置

- 適切な消火剤 : 周辺火災に応じて、適切な消火剤を使用する。
使ってはならない消火剤 : 強い水流は使用しない。
火災時の危険有害性分解生成物 : 火災時に刺激性もしくは有毒なフュームまたはガスを発生する。
消火方法 : 着火した場合、初期消火は、火元(燃焼源)を断ち、適切な消火剤を用いて一挙に消火する。
周辺火災の場合、移動可能な容器は速やかに安全な場所に移す。
移動不可能な場合、容器及び周囲の設備等に散水し、冷却する。
消火時の保護具 : 消火作業の際は、空気呼吸器を含め防護服(耐熱性)を着用する。

6. 漏出時の措置

人体に対する注意事項、保護具および緊急時措置

- 一般的措置 : 作業の際には、吸い込んだり、眼、皮膚及び衣類に触れないように、必ず適切な保護具を着用し、風下で作業行わない。

環境に対する注意事項

- 環境に対する注意事項 : 環境への放出を避けること。
下水道や公共用水域への侵入を防ぐ。

封じ込め及び浄化の方法及び機材

- 浄化方法 : 漏出は、吸収剤を使用してできるだけ素早く回収する。
できるだけ液体漏出物は密閉容器に回収する。
回収跡は多量の水で洗い流す。

7. 取扱い及び保管上の注意

取扱い

- 技術的対策 : 吸い込んだり、眼、皮膚及び衣類に触れないように、適切な保護具を着用して作業する。
漏れ、あふれ、飛散しないように取扱い、ミスト、蒸気の発生を少なくし、換気を十分にする。

- 安全取扱注意事項 : この製品を使用するときに、飲食又は喫煙をしないこと。

取扱い後はよく手を洗いうがいをすること。

作業所の十分な換気を確保する。

接触、吸入又は飲み込まないこと。

- 接触回避 : 長時間または反復の暴露を避ける。

保管

- 安全な保管条件 : 直射日光を避け、換気の良い場所に保管する。容器を密閉し、火気、熱源より遠ざける。

- 安全な容器包装材料 : 遮光した気密容器。

- 技術的対策 : 適用法令を遵守する。

- 保管温度 : 冷暗所保管

8. ばく露防止及び保護措置

- 設備対策 : 取扱場所での発生源の密閉化、または局所排気装置、全体換気装置の設置。取扱い場所の近くに安全シャワー、洗眼設備を設け、その位置を明瞭に表示する。

保護具

皮膚及び身体の保護具	: 不浸透性前掛け、不浸透性作業衣、保護長靴
眼の保護具	: 保護眼鏡(普通眼鏡型、側板付き普通眼鏡型、ゴーグル型)
手の保護具	: 不浸透性保護手袋
呼吸用保護具	: 有機ガス用防毒マスク

9. 物理的及び化学的性質

物理状態	: 液体
外観	: 液体
色	: 無色透明
臭い	: 弱い芳香臭
pH	: データなし
融点	: -78 ° C
凝固点	: データなし
沸点	: 201.9 ° C
引火点	: 90 ° C (密閉式)
自然発火点	: 204 ° C
分解温度	: データなし
可燃性	: データなし
蒸気圧	: 0.0133 kPa (25°C)
相対密度	: データなし
密度	: 0.99 g/cm ³ (20°C)
相対ガス密度	: データなし
溶解度	: 水に易溶。多くの有機溶剤に可溶。
n-オクタノール/水分配係数 (Log Pow)	: データなし
爆発限界 (vol %)	: 1.2 - 23.5 vol % (空気中)
動粘性率	: データなし
粒子特性	: データなし

10. 安定性及び反応性

反応性	: データなし
化学的安定性	: 通常取り扱い条件では安定である。吸湿性がある。
危険有害反応可能性	: 強酸化剤と反応し、火災や爆発の危険をもたらす。アルカリ金属酸化物と反応する。爆発性過酸化物を生成することがある。ある種のプラスチック、被膜剤を侵す。
避けるべき条件	: 日光、湿気、熱、火花、裸火、静電気等の発火源。強酸化剤、アルカリ金属酸化物との接触。
混触危険物質	: 強酸化剤、アルカリ金属酸化物
危険有害な分解生成物	: データなし

11. 有害性情報

ジエチレングリコールモノエチルエーテル	
急性毒性 (経口)	【分類根拠】(1)～(8)より、区分外とした。【根拠データ】(1)ラットの LD50: 10,502 mg/kg (SIAR(2005)、DFG(2007)、Patty(6th, 2012))。(2)ラットの LD50: 7,410 mg/kg (SCCS(2013)、ECETOC TR 95 vol. II(2005))。(3)ラットの LD50: 5,400～5,500 mg/kg (SCCS(2013)、ECETOC TR95 vol. II(2005))。(4)ラットの LD50: 6,000 mg/kg (SCCS(2013)、ECETOC TR95 vol. II(2005))。(5)ラットの LD50: 6,310 mg/kg (SCCS(2013)、ECETOC TR95 vol. II(2005))。(6)ラットの LD50: 8,690 mg/kg (SCCS(2013)、Patty(6th, 2012))。(7)ラットの LD50: 5,540 mg/kg (SCCS(2013)、Patty(6th, 2012))。(8)ラットの LD50: > 5,000 mg/kg (SCCS(2013))。

ジエチレングリコールモノエチルエーテル	
急性毒性 (経皮)	【分類根拠】(1)～(4)より、区分外とした。【根拠データ】(1)ウサギの LD50: 9,143 mg/kg (SIAR(2005)、DFG(2007)、Patty(6th, 2012)) (2)ウサギの LD50: 8,300 mg/kg (SCCS(2013)、ECETOC TR95 vol. II(2005)) (3)ウサギの LD50: 4,200 mg/kg (SCCS(2013)) (4)ラットの LD50: 6,000 mg/kg (SCCS(2013)、ECETOC TR95 vol. II(2005))
急性毒性 (吸入: 気体)	【分類根拠】GHS の定義における液体である。
急性毒性 (吸入: 蒸気)	【分類根拠】データ不足のため分類できない。
急性毒性 (吸入: 粉末)	【分類根拠】(1)より、区分外とした。なお、試験濃度は飽和蒸気濃度は 126 ppm(0.69 mg/L)よりも遥かに高い濃度であり、ミスト基準を適用した。【根拠データ】(1)ラットの LC50(4 時間): 5.24 mg/L(SCCS(2013)、BG Chemie Toxicological Evaluations(1995))
急性毒性 (吸入: ミスト)	データなし
皮膚腐食性/刺激性	【分類根拠】(1)～(4)より刺激性を示さないとの情報、(5)～(7)より軽度の刺激性を示すとの情報が得られており、ガイダンスに従い、区分外(国連分類基準の区分 3)とした。【根拠データ】(1)ヒト 25 人に本物質調剤(20%ワセリン)を 48 時間閉塞適用したところ、刺激性は見られなかったとの報告がある(SIAR(2005)、DFG(2007))。(2)ウサギを用いた皮膚刺激性試験(n=6)で本物質 50%水溶液を 24 時間閉塞適用したところ、72 時間後までの紅斑、浮腫平均スコアは共に 0 だったとの報告がある(SCCS(2013))。(3)本物質はヒトで皮膚一次刺激性を示さないとの報告がある(ECETOC TR95 vol. II(2005))。(4)ウサギの皮膚への適用時間を延長したり、反復ばく露しても、本物質は刺激性を示さないとの記述がある(Patty(6th, 2012))。(5)ヒトボランティア 10 人に本物質を 48 時間閉塞適用したところ、1 例で軽度(グレード 1)の紅斑が見られただけだったとの報告がある(SCCS(2013))。(6)ウサギを用いた皮膚刺激性試験(n=6)で本物質原液を 24 時間閉塞適用したところ、無傷部位のうち 1 箇所で紅斑又は痂皮又は浮腫のスコアが 2 を示したが、その他のスコアは 0、平均スコアも 0.3 だったとの報告がある(SIDS Dossier(2005))。(7)ウサギの皮膚に最大 11,300 mg/kg、モルモットの皮膚に最大 1,000 mg/kg を閉塞適用したところ、軽度の刺激性がみられたとの報告がある(SIDS Dossier(2005)、DFG(2007))。
眼に対する重篤な損傷又は刺激性	【分類根拠】(1)～(5)より、本物質は軽度の眼刺激性を示すこと、また(1)、(2)より細区分可能と判断し、区分 2B とした。なお、区分 2 を示唆する情報(6)も得られているが、信頼性が高い複数のデータ(1)、(2)及びそれを支持するデータ(3)～(5)を重視した。【根拠データ】(1)ウサギを用いた眼刺激性試験(OECD TG405、GLP 準拠、n=3)で本物質原液を適用したところ、24 時間後に結膜の浮腫(スコア 1)が 1/3、結膜の発赤(スコア 1)が 3/3 で見られたが、48 時間で回復したとの報告がある(SCCS(2013))。(2)ウサギを用いた眼刺激性試験(OECD TG405、GLP 準拠、n=3)で本物質 30%水溶液を適用したところ、1 時間後に結膜の発赤(スコア 1)が 2/3、浮腫(スコア 1)が 2/2 で見られたが、24 時間後には回復したとの報告がある(SCCS(2013))。(3)ウサギを用いた眼刺激性試験(Directive 79/831/EEC B.5(OECD TG405 相当)、GLP 準拠、n=6)で本物質原液を用いたところ、結膜の紅斑、浮腫及び角膜混濁の平均スコアはそれぞれ 1.37、0.17 及び 0.22 だったとの報告がある(SIDS Dossier(2005))。(4)ウサギを用いた眼刺激性試験で本物質原液を適用したところ、軽度の刺激性(障害の程度: 10 段階中レベル 2)が見られたとの報告がある(SIDS Dossier(2005))。(5)本物質はウサギの眼に軽度の刺激性を示し、軽度の疼痛反応、結膜の発赤、角膜の肥厚が認められたとの報告がある(ECETOC TR95 vol. II(2005))。【参考データ等】(6)本物質はウサギの眼に中等度(moderate)の刺激性を示すとの報告がある(Patty(6th, 2012))。
呼吸器感作性	【分類根拠】データ不足のため分類できない。
皮膚感作性	【分類根拠】ヒトに関するデータは得られているが、感作性の有無を判断できる十分な情報は得られておらず、データ不足で分類できないとした。【参考データ等】(1)ヒトボランティア 24 人に本物質の腕の皮膚への 3 週間閉塞適用を 9 回繰り返す(感作段階)、15 日間の適用休止後に背部皮膚に適用したところ(誘発段階)、感作性は見られなかったとの報告がある(SCCS(2013))。(2)ヒトボランティア 25 人に本物質 20%調剤(ワセリン中)を適した Maximization 試験において、皮膚感作性は陰性だったとの報告がある(SIAR(2005)、DFG(2007))。(3)本物質はヒトで感作性を示さないとの報告がある(ECETOC TR95 vol. II(2005))。
生殖細胞変異原性	【分類根拠】(1)～(3)より、ガイダンスに従い分類できないとした。【根拠データ】(1)マウス骨髄を用いた in vivo 小核試験(腹腔内投与、1,980 mg/kg を 2 日連続投与)で、陰性の結果が得られている(SCCS(2013)、ECETOC TR 95(2005)、SIAR(2005)、DFG(2007))。(2)ラット初代肝細胞を用いた in vivo 不定期 DNA 合成試験(経口投与、最大 2,000 mg/kg、単回投与)で、陰性の結果が得られている(SCCS(2013))。(3)In vitro では、複数の細菌を用いた復帰突然変異試験で陰性(弱陽性 1 件)であった

ジエチレングリコールモノエチルエーテル	
	(ECETOC TR 95 vol. II (2005)、SCCS (2013)、SIAR (2005)、NTP DB (Accessed Jan. 2019))。
発がん性	【分類根拠】発がん性に関して、利用可能なヒトを対象とした報告はない。国内外の分類機関による既存分類はなく、データ不足のため分類できない。【参考データ等】(1) ラットを用いた 2 年間混餌投与 (約 1,000 mg/kg/day)、および 718 日間飲水投与 (最大 950 mg/kg/day) 試験で、腫瘍発生の増加はみられなかったが、いずれも現行の発がん性試験の要求基準を満たさず、発がん性評価に利用できない (SIAR (2005)、ECETOC TR 95 vol. II (2005)、DFG (2007)、Patty (6th, 2012))。
生殖毒性	【分類根拠】(1)、(2) より、本物質は経口経路では繁殖毒性を示さないと考えられる。また、(3)、(4) から経口経路での発生影響は、限量量、ないしそれを上回る大量投与にも関わらず、ラットで最小限の影響、マウスで不検出であり、分類根拠とすべき所見はみられていない。その他の経路についても、(5)、(6) から、発生影響に関して懸念すべき所見はない。ただし (3) では母体に影響のないレベルで軽度の影響 (骨化遅延) がみとめられていること及びウサギのデータが得られなかったことを踏まえ、区分外ではなく分類できないとした。【根拠データ】(1) マウスを用いた飲水投与による 2 世代試験 (NTP による連続交配試験) において、F1 雄親動物の 25,000 ppm (4,400 mg/kg/day: SCCS (2013)) で精巣上体尾部の精子運動能の低下がみられたが、F0、F1 親動物ともに最高用量の 25,000 ppm まで繁殖能への影響は認められなかった (SIDS Dossier (2005)、ECETOC TR95 vol. II (2005)、DFG (2007)、SCCS (2013)、Patty (6th, 2012))。(2) 本物質製品 (Transcutol HP、純度: 99.9%) を被験物質とした経口投与によるラット 1 世代生殖毒性試験 (最大 2,000 mg/kg/day: OECD TG 415、GLP 準拠) では、雄に交配 63 日前から交配期間を経て剖検前日まで、雌には交配 14 日前から交配期間を経て妊娠 7 日まで投与した結果、親動物には 1,000 mg/kg/day 以上で体重増加抑制や症状 (流産、鎮静) がみられたが、最大投与量である 2,000 mg/kg/day まで生殖発生影響は認められなかった (SCCS (2013))。(3) 本物質製品 (Transcutol HP、純度: 99.98%) を被験物質としたラット出生前発生毒性試験 (OECD TG 414、GLP 準拠) では、妊娠ラットの器官形成期 (妊娠 6~17 日) に強制経口投与された。その結果、2,000 mg/kg/day の投与により母動物毒性 (体重増加抑制、摂餌量減少) がみられ、より低用量の 1,000 mg/kg/day の投与により胎児に骨化遅延がみられたが、他に発生影響はみられなかった (SCCS (2013))。(4) 妊娠マウスの器官形成期 (妊娠 6~13 日) に本物質を 5,500 mg/kg/day で強制経口投与した試験では、母動物の 14% (7/50 例) が死亡したが、得られた胎児には異常所見はみられなかった (SIDS Dossier (2005)、DFG (2007)、SCCS (2013))。(5) 妊娠ラットの器官形成期 (妊娠 7~15 日) に本物質を 102 ppm で吸入ばく露 (7 時間/日) した試験では、母動物、胎児ともに異常所見はみられなかった (SIDS Dossier (2005)、Patty (6th, 2012)、DFG (2007)、SCCS (2013))。(6) 妊娠ラットの器官形成期 (妊娠 7~16 日) に本物質を 4 回/日で計 1.4 mL/rat/day (5,600 mg/kg/day: SCCS (2013)) を経皮適用した試験では、母動物、胎児ともに異常所見はみられなかった (SIDS Dossier (2005)、DFG (2007)、Patty (6th, 2012)、SCCS (2013))。なお、SCCS は本試験では被験物質が閉塞適用されていないため、適用部位からの蒸発による損失を無視できず、結論を導けないと指摘している (SCCS (2013))。
特定標的臓器毒性 (単回ばく露)	【分類根拠】データ不足のため分類できない。【参考データ等】(1) 本物質 47% を含む液体を 300 mL 飲んだアルコール依存症男性が重篤な中枢神経症状、呼吸器障害 (呼吸困難)、口渇およびアシドーシスを生じ、尿にはアルブミンが含まれていたとの報告がある (SCCS (2013)、ECETOC TR 95 vol. II (2005)、DFG (2007))。
特定標的臓器毒性 (反復ばく露)	【分類根拠】(1) より区分 1 (呼吸器) とした。なお、(2) ~ (4) より経口経路、経皮経路では、区分 2 までの用量範囲では標的臓器を特定可能な所見はない。【根拠データ】(1) ラットの 28 日間吸入ばく露試験 (6 時間/日、5 日/週: 蒸気と推定) において、270 mg/m ³ (ガイダンス値換算: 0.06 mg/L、区分 1 の範囲) から、喉頭と鼻甲介の軽度刺激、および喉頭の腹側小軟骨の壊死 (2/5~3/5 例) が認められた (SIAR (2005)、ECETOC TR 95 vol. II (2005)、DFG (2007)、Patty (6th, 2012)、SCCS (2013))。なお、試験空気濃度の濃度範囲 (0.02~0.24 mg/L: 3.6~10.9 ppm) は飽和蒸気圧濃度 (126 ppm) の 90% 未満であり、蒸気の基準を適用した。【参考データ等】(2) げっ歯類を用いた経口投与試験としては、ラット 6 週間強制経口投与 1 試験、ラット 90 日間混餌投与 2 試験、およびマウス 90 日間混餌投与 1 試験の報告があるが、全般に本物質は低毒性で、最小の NOAEL はラット 90 日間混餌投与試験の 250 mg/kg/day であった。なお、各試験とも区分 2 超の高用量では腎臓への影響が共通してみられている (SIAR (2005)、ECETOC TR 95 vol. II (2005)、DFG (2007)、Patty (6th, 2012)、SCCS (2013))。(3) 本物質製品 (Transcutol HP、純度 (本物質として): > 99.9%) をイヌに 90 日間強制経口投与した試験 (OECD TG 408、GLP 準拠) で、最高用量の 2,000 mg/kg/day では雄 2 例、

ジエチレングリコールモノエチルエーテル	
	雌 1 例が死亡し、死亡例の腎臓に重度の尿細管変性が認められた。それ以下の用量では肝臓重量増加がみられたが、適応性の変化と判断され、NOAEL は 1,000 mg/kg/day と報告されている (SCCS (2013))。 (4) ウサギに 12 週間経皮適用 (5 日/週) した試験、およびウサギに 90 日間経皮適用した試験で、いずれも 1,000 mg/kg/day 相当以上で腎臓への影響がみられ、NOEL が約 300 mg/kg/day と報告されている (SIAR (2005)、DFG (2007)、SCCS (2013))。
誤えん有害性	【分類根拠】データ不足のため分類できない。

12. 環境影響情報

ジエチレングリコールモノエチルエーテル	
水生環境有害性 短期(急性)	甲殻類(オオミジンコ)48 時間 LC50 = 3340 mg/L(EPA AQUIRE: 2018、Thurston,R.V. et al. (1985))、魚類(アメリカマス)96 時間 LC50 = 6010 mg/L(EPA AQUIRE: 2018、NLM HSDB:2018、Thurston,R.V. et al. (1985))であることから、区分外とした。
水生環境有害性 長期(慢性)	急速分解性があり(良分解性: 類似化学物質の分解性との比較により判定(化審法 DB: 2012))、甲殻類(ネコミジンコ)の 7 日間 NOEC (繁殖) = 7.38 mg/L(OECD SIDS: 2005)であることから、区分外とした。
残留性・分解性	データなし
生体蓄積性	データなし
土壌中の移動性	データなし
オゾン層への有害性	データなし

13. 廃棄上の注意

- 化学品(残余廃棄物) : 都道府県知事の許可を受けた産業廃棄物処理業者に、内容を明示して処理を委託する。
- 汚染容器及び包装 : 容器の内容物を完全に除去してから廃棄する。
空容器は地域の条例に準拠してリサイクル、再利用または廃棄する必要がある。

14. 輸送上の注意

国際規制

海上輸送(IMDG)

- 国連番号 (IMDG) : 非該当
- 正式品名 (IMDG) : 非該当
- 容器等級(IMDG) : 非該当
- 輸送危険物分類 (IMDG) : 非該当

航空輸送(IATA)

- 国連番号 (IATA) : 非該当
- 正式品名 (IATA) : 非該当
- 容器等級 (IATA) : 非該当
- 輸送危険物分類 (IATA) : 非該当

海洋汚染物質

- : 非該当

国内規制

- 海上規制情報 : 非該当
- 航空規制情報 : 非該当

特別な輸送上の注意

- : 運搬に際しては、容器の転倒、損傷、落下、荷崩れ等しないように積み込み、漏出のないことを確認する。

15. 適用法令

国内法令

化審法	: 優先評価化学物質(法第2条第5項)
労働安全衛生法	: 非該当
毒物及び劇物取締法	: 非該当
消防法	: 第4類引火性液体、第三石油類水溶性液体(法第2条第7項危険物別表第1・第4類)
海洋汚染防止法	: 有害液体物質(Z類物質)(施行令別表第1)
外国為替及び外国貿易法	: 輸出貿易管理令別表第1の16の項
化学物質排出把握管理促進法(PRTR 法)	: 非該当

16. その他の情報

参考文献	: 17221 の化学商品(化学工業日報社) 国際化学物質安全性カード(ICSC) 独立行政法人 製品評価技術基盤機構(NITE) ERG2016 版 緊急時応急措置指針(日本規格協会)
その他の情報	: この SDS は林純薬工業株式会社の著作物です。当該製品の化学物質製品を取り扱う事業者に対して提供するものであり、安全を保証するものではありません。現時点における該当化学物質の情報を全て検証しているわけではありません。当該化学物質について常に未知の危険性が存在するという認識で、製品運搬・開封から廃棄に至るまで、安全を最優先して使用者自己の責任においてご使用下さい。当該化学物質を使用する際は、使用者自ら安全情報を収集すると共に使用される場所・機関・国などの、法規制等については使用者自ら調査し最優先させてください。国または地方の規制についての調査は、当社としては行いかねますので、この問題については使用者の責任で処理願います。当該物質の日本語による SDS と他国言語にて翻訳された SDS が存在する場合、内容の相違があるなしに関わらず日本語で記述された文書が優先され他国言語による文書は参考文書とします。